



BSR 通信

BSR 推進室ニューズレター第 26 号

平成 28 年 5 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巢鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

expression/representation

表現学部 表現文化学科 准教授 山田 潤 治

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：研究ノート
- 3 頁：BSR トピックス
- 4 頁：BSR 図書室 / 今後の予定

手塚治虫の漫画『火の鳥鳳凰編』に我王という仏師が登場する。我王は、自身が抱く内面の感情を表出させて仏像を彫るのだが、私は子どもの頃、この漫画を読んで、我王が自らの我執を、時に激情のおもむくままに、特に静謐のなかに、表現する姿に、強い畏怖をおぼえた。なにかを表現することは、いかに内面をほとばしらせることかが重要になるのだ、ということが幼かった頃の私の理解であった。しかし、長じて、『火の鳥』を読みなおした時、我王が仏師であって、常に自身の内面に、仏像という形を与えていることを意識するようになった。

私が所属する表現学部は、なにかをいかに表現するか、を教育目標と

する学部であるが、そもそも「表現」には二面があると思う。たとえば、表現を意味する英語はいくつかあるが、代表的なのが expression と representation の二語だろう。expression は、「外に」(ex)

「おしだす」(press)がその原義であり、representation は、「再」(re)「現前」(present)がその原義である。つまり、expression は、自分の中にあるものを表に出すことであり、representation は、かつてあったものを再現すること、である。『火の鳥』の我王の例で言えば、彼が自らの内なる怒りを、木や石に刻む時、彼の表現は expression であり、他方、静謐な心をもって木の中、石の

中に仏を見出す時、彼の表現は representation である。

芸術における創作の源泉を自らの内に求めるか、あるいは外に求めるか、これはまさしく、古典主義とロマン主義の問題であり、どちらが良い悪いの問題ではない。私は、いつも表現学部の講義においてかならず、expression か representation か、自身の創作上の姿勢がどちらに傾いているのかを自己分析するよう学生に求めている。さざえ堂で仏様のお顔を拝むたびに、自分の心のうちが映しだされているのか、あるいは、「私」から超然とした存在がそこに現れているのか。それは学生だけではなく、私自身の問題でもあるのだ。

研究ノート

米国のチャプレン教育

— 科研研究会報告③ —

本ノートでも、しばしば紹介してきたように、東日本大震災を契機として、東北大学で臨床宗教師の養成（講座名「実践宗教学」）がはじまり、その輪は次第に広がり、今では龍谷大学、高野山大学、鶴見大学、上智大学、武蔵野大学、種智院大学など宗教系大学で講座が開設されています。また、ほぼ時を同じくして（公財）全国青少年教化協議会・臨床仏教研究所では、臨床仏教師の育成をスタートさせました。

その全国青少年教化協議会が、4月19日、東京大学仏教青年会会館において公開研究会「現代米国における仏教チャプレンシー」を開催しました。研究会の目的およびプログラムは次のようになっています。

臨床仏教研究所では、2013年より「臨床仏教師育成」プログラムを運営しています。本プログラムは、スピリチュアルケアの世界基準となっている米国の臨床パストラル教育プログラム（CPE）や、南方仏教国で実践されてきたエンゲイジド・ブディストの教育プログラムを日本の宗教文化風土に沿って発展させたものです。「臨床仏教師」養成プロ



ほぼ満員の場内

グラムでは、台湾の「臨床仏教宗教師」養成プログラムとの連携をとり、また米国の仏教チャプレン教育についても調査を行ってきました。

米国 CPE の伝統のなかで、仏教チャプレン養成はコンテンプレイティブ・ケアの担い手として独自の発展を見せており、その内実を知ることが、現在のわが国の「臨床仏教教育」及び「臨床宗教教育」を確立していく上で、極めて重要なプロセスであると考えます。

本企画では、米国仏教チャプレン事情の報告をもとに、わが国のスピリチュアルケア、いのちのケアをリードする諸氏を交えて公開研究会を行い、今後の発展と協働の機縁とすることを目的としました。（臨床仏教研究所 HP より）

■プログラム内容

発題1 古村文伸氏（ペンシルバニア大学病院）「米国仏教チャプレン教育の実際」

発題2 ジョナサン・ワッツ氏（臨床仏教研究所）「米国仏教チャプレン教育の現状について」

■コメント&ディスカッション

コメント1 島藺進氏（上智大学）「臨床宗教教育の視点から」

コメント2 窪寺俊之氏（聖学院大学）「米国の CPE からの視点から」

コメント3 蓑輪顕量氏（東京大学）「エンゲイジド・ブディズムの視点から」

モデレーター 神仁（臨床仏教研究所）
総合司会 大河内大博（いのち臨床仏教者の会）

アメリカのチャプレン教育

古村文伸氏は在家出身で、長年、エンジニアとして会社勤務をしていたものの、50歳を過ぎてから仏教を学び始め、ある時、回心体験をして出家を決



左より、古村氏、ワッツ氏、窪寺氏、島藺氏、蓑輪氏

意。第二の人生として、チャプレンを目指すようになった異色の経歴。

アメリカのチャプレンは神学修士（Master of Divinity）を取得している必要があるため、古村氏はコロラド州ボルダーにある仏教系大学であるナロパ大学の神学修士課程に進学。2010年8月から2014年5月まで在学した同大での同期は9名、女性4名、男性5名、年齢は20代から60代、経歴もパイロットや会計士など多種多様なメンバーだったそうです。古村氏が受けたCPEは、臨床300時間、座学100時間で1単位×4が必須単位です。

チャプレンの資格を取得した後は、2015年8月から現在までペンシルベニア大学病院で実習にはげむ古村氏。そこでの担当は、循環器集中治療室・進行性循環器疾患・胸部疾患の患者、そして、夜間・休日の交代勤務で、後者の場合、外傷救急が主になるため、銃・刃物・事故などによる負傷者と家族のケアを行うこととなります。

チャプレンの病院での役割は、患者・家族との面会がまずあげられますが、要請があって病室を訪問する場合と院内を巡回して声をかけられれば対応する場合の二種があるとのこと。苦しさや恐怖といったスピリチュアルな痛みを耳を傾け、患者や家族が希望する場合には祈りをささげることもあるといま

す。その他に、家族と医師によって開かれる生命維持装置を外すかどうかという重い決断を迫られる会議に同席したり、医師・看護婦などスタッフへのケアもチャプレンの仕事の一つです。

古村氏からは実際の現場でどのような会話がなされるのか、いくつか例が示されましたが、いずれも死を目前にした人とともにある、厳粛な空気を感じさせるものでした。

西洋と日本の相違とは

古村氏に対して、コメンテーターの窪寺氏が質問したことが印象に残りました。

窪寺氏もアメリカでチャプレン教育を受けた経験があります。窪寺氏の経験では、チャプレン教育は、きわめて実存的な、「私」という個人を徹底的に見つめさせられる教育プログラムであり、窪寺氏には、とてもつらいものだったと言います。窪寺氏は、それは西洋の「個人」主義を背景としたものではないかと考察し、縁や絆を重視する精神風土の日本に、そのまま欧米のチャプレン教育を導入するのは、妥当なのだろうかという質問でした。

古村氏から明確な回答はありませんでしたが、臨床宗教師・臨床仏教師が始まったばかりの日本では、どうしても先

例として、欧米のチャプレン教育の一つの手本としていかにざるをえないだけに、窪寺氏の問いかけは、非常に本質的な部分をついたもののように思われます。

今後、日本にチャプレンが定着するにしたいが、教育の在り方も、日本の宗教文化、精神風土に適合したものへと変容していくことでしょうし、試行錯誤の連続になるでしょう。その過程を今後も注視しながら、宗教者・仏教師が臨床の場面で果たすべき役割を考察していきたいと思います。

ワッツ氏の発表については項をあらためて報告する予定です。(O)

BSR トピックス 『地域寺院』 始まります!!

大正大学では、この 4 月より新たに地域創生学部を立ち上げ、日本各地で活躍できる人材を育てようと新たな取り組みを始めました。また、新学部設置に先駆け、昨年 9 月より『地域人』という雑誌を発行し、東京から地方各地を盛り上げるための旗振りをしております。

そして、このたび『地域人』の寺院向け別冊付録として、『地域寺院』（ダジャレみたいですが本気です）を創刊することになりました。

近代化、過疎化、少子高齢化、大きく変わりゆく社会の中で、人々の宗教に対する意識は変わってきています。これま

で日本人の生活と深くかかわっていた仏教寺院は今後どうなっていくのでしょうか。

『地域寺院』では、地域に密着して地道な活動をされている寺院を毎号取材するほか、今後の仏教界をリードしていくであろう各宗派の若手僧侶へのインタビューを通じ、明日の寺院のあり方を考えるヒントとしたいと思います。そのほか誌面では、寺院運営に欠かせないさまざまな人をお呼びし、覆面座談会形式でお坊さんへの本音を聞き出すコーナーや、連載寄稿として、仏教界への提言、お寺で地域包括ケア、寺院会計講座などの内容で構成する予定です。

寺院向けの冊子ですので一般の方が目にすることはあまりないかもしれませんが、しかし、だからこそ、僧侶ならではの本音が盛り込めるのではないかと思います。

この『地域寺院』は、来月 6 月 10 日ごろお届けの予定です（『地域人』と同時送付）。あらたな、BSR（仏教師の社会的責任）の推進活動にどうぞご期待ください。(T)



仕様

- ◇判型：AB 版（210mm×257mm）
- ◇オールカラー、16 頁

※『地域人』を定期購読される寺院にお届けいたします。



BSR 図書室

みうらじゅん 著

マイ仏教

(新潮社 2011 年、680 円+税)



「人生で大切なことはすべて仏教が教えてくれた」

本書の「はじめに」はこの書き出しで始まります。

みうらじゅんさんは、「マイブーム」、「ゆるキャラ」の名付け親としても知られ、実に多才で、様々な分野で活躍している方です。本書の著者プロフィールにも「イラストレーターなど」と書かれているほどです。そのみうらさんがどれだけ仏教好きかが分かる書であるとともに、その独自の視点で書かれた仏教入門書です。

まず、小学校 4 年生の時の「怪獣ブーム」をきっかけとして「仏像」に魅かれていったことから始まった氏の仏教フリークの遍歴が書かれます。第 3 章以降は、仏教の教えを、自らの経験に即して解釈し、わかり易く説明されています。「後ろ

メタファー」、「自分なくし」、「撲滅運動」など、言葉をもじった洒落の効いた表現に思わず引き込まれます。

今般耳にする仏教の危機感に対し、ご自身の「仏教」を語ることで、今までとは違ったアングルで仏教をとらえる方が増えて、すそ野が広がれば・・という思いで書いたことが紹介されています。

仏女、仏像ブーム、ご朱印ブームなど、著者までとは言わないまでも、一般の方の仏教への関心はとて高いようです。その気持ちを慮ることは、我々僧侶が、その期待に応えるヒントとなるように思いました。また大いに刺激を受ける一冊です。(M)

今後の予定

5 月 21 日 (土)	11 時～・13 時～ 9 時～13 時 12 時～13 時	鴨台花まつり (5 宗派合同) あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5 号館 1 階
6 月 18 日 (土)	11 時～12 時 9 時～13 時 13 時～15 時	花会式 (真言宗豊山・智山合同) あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5 号館 1 階



巻頭言執筆者 紹介

山田 潤治 (やまだ じゅんじ)

大正大学 表現学部 表現文化学科 准教授

慶應義塾大学 総合政策学部 卒業

慶應義塾大学大学院 メディア・政策研究科修士課程 修了

専門は比較文学。日本の戦後文学批評における歴史の叙述について。

特に江藤淳 (文学評論家、元 東工大・慶大・本学教授) が、米国人文学評論家のエドモンド・ウィルソン、精神分析学者のエリック・エリクソンからどのように影響をうけ、自身の文学観を構築していったかを研究している。

巻頭写真

すがも鴨台観音